

第10章 遠い形: wouldとcouldの処理

would と could という助動詞を、中学校3年までの教育のように、それぞれ will と can の過去形と言われただけでは事は収まらない場合がある。ひと言で言えば、両者は仮定法として使われることもあるということだが、仮定法の説明は困難をきわめる。なぜなら、「仮定法過去は、形は過去形だが、意味は現在の逆の仮定で、一方、仮定法過去完了は、形は過去完了だが意味は過去の逆の仮定」という入り組んだ説明になるからだ。実は、英米人でも時々この話が混乱するらしく、過去の推量で could have + p.p. を使わなければいけないのに、could だけにしてみたり、過去の事実の逆でもないのに would have + p.p. を使ってしまった(⇒ §101)、というようなことが起きる。

筆者は個人的に、直説法だろうが仮定法だろうが、動詞の二番目の活用をすべて“遠い形”と名付けている。基本的に時制とは時間ではなく、近いか遠いかという気分(mood)だということである(詳しくは『和文英訳教本 文法矯正編』(p.XX)を参照していただきたい)。文法用語では仮定法は the subjunctive mood であり、mood は「法」と訳されるが、「気分」のままではよいのではないかと思う。遠い気分なら“遠い形”を使うのである。そして、“遠い”の意味は3つあって、①時間的に遠い(直説法過去形) ②現実から遠い(仮定法) ③人間関係が遠い(丁寧・婉曲表現)である。

とは言え、正確な英文解釈をするためには、would や could がどの用法で使われているのかを詳らかにせねばならないので、この判別の仕方をこの章で検証することにするが、次のようなことが大雑把に言える。すなわち、①なら〈時を表す副詞(句・節)〉が添えられているとか〈前後の文も遠い形〉である、②なら〈現実にはあり得ない話〉で〈前後の文は遠い形以外〉である、③なら主に Would you ~? や Could you ~? や would like to の形で使われる。

- ① 時間的に遠い(直説法過去形) ⇨ 〈時を表す副詞(句・節)〉と使う前後の文も〈遠い形〉
- ② 現実から遠い(仮定法) ⇨ 現実にはあり得ない話前後の文は〈遠い形〉以外
- ③ 人間関係が遠い(丁寧・婉曲表現) ⇨ Would you ~? / Could you ~? / would like to など